世界の片隅で生きよう

華瑞季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
世界の片隅で生きよう

【Ｎコード】
Ｎ１４２６Ｗ

【作者名】
華瑞季

【あらすじ】
飛行機事故でＨＵＮＴＥＲ×ＨＵＮＴＥＲの世界に飛ばされた澄樹が、ハンターとして世界の片隅で生きる物語。スミキは基本的に原作に干渉しようとはしませんが、彼女がこの世界で生きるせいで運命が変わってしまった人も出ます。※ゾルディック関係、旅団関係はたぶんキャラすら出ません。今の所、日常的なことばかりでＲ１５っぽいシーンや残酷なシーンはさっぱり有りません。※多忙により、次回更新は１０／１０前後になります。

落ちてきた私と師匠

「遅いっ！！　指を立てたらすぐに凝って言ったでしょうが」

「うぅ……師匠の鬼！！」

殴られた頭の痛みに、思わず悪態をついてしまう。

私を殴った師匠は、怒っても可愛らしい表情で赤色のゴスロリドレスのスカートの裾を軽やかに揺らしながら睨んでくる。

「強くなりたいって言ったのはスミキ、あんただわさ。あたしの弟子なら四の五の言わずにやるっ」

そう言いつつ、またひっそりと指を立てた師匠に気がついて慌てて私は凝を使う。

目に力を込めるというか……集中すると、その指先に念で作られた数字が見える。

「6！！」

「正解」

満足そうに師匠は微笑んだ。

私は井上（いのうえ）　澄樹（すみき）。男みたいな名前だけど、れっきとした女である。
本当は男の孫が欲しかったお祖父ちゃんが付けてくれた名前で、
自分でもちょっとこの名前には困らされていた。

……過去形なのは、マンガのハンター×ハンターだったこの世界
に、私が落ちてきてしまったから。

元の世界の最後の記憶は、海外旅行に行くために乗っていた旅客
機がエンジン故障で海へと墜落する瞬間だった気がする。
あれから二年たった今でも、悪夢として時々見るくらいだし。

そして、何故か師匠に拾われ今に至っている。

私の師匠は、ビスケット＝クルーガー、通称ビスケ。
原作のＧＩ編で主人公たちの師匠となる人。
見た目は金色の髪の人形のように可愛らしい少女。

実際の筋骨粒々としたあの姿は、私は見たことはない。

ちなみに、宝石の原石を求めてアイジアン大陸にある原生林の奥の鉱山まできた所、上空から光を放ちながら私が落ちてきたそうだ。
……思わず、それを聞いたときに「親方！　空から女の子が！！」という、あの有名なセリフを言いそうになった私を誰もせめはしないはず。

それで、色々身の上を聞かれたりなんだりして、かなり怪しまれたんだけど……まあ、ここがマンガの世界だということだけは隠して身の上を話して、信用してもらった。

まあ、持っていた持ち物がこの世界にはないものだったしねえ。
手持ちの細々したものを入れていた肩掛けタイプの布カバンも一緒にこっちに来たみたいで、その中にこの世界じゃ使われてない文字が使用された小説や、目的地だったイギリスのガイドブックとかモバイルＰＣとかＭＰ３プレイヤー（ｉｐｏｄじゃない）とか色々出てきたから。

漢字自体は、ハンゾーの出身地だっけ？　ジャポンは漢字を使ってるみたいだけど、ひらがなとかカナは存在しないみたい。

師匠が、こんな私を拾ってくれた理由は実は他にもある。

私、２８歳なんだ。

でも、この世界に来たら若変ってしまったのか、どう見ても１４～１５歳くらい……いや下手したら、もっと下かもしれない。

ＰＣに取り込んでおいた自分の写真とか見せたら、師匠はかなり興味津々だった。

師匠は念能力で若返りしているわけだし、もっと他に方法があれば楽だと思っているのは間違いない。

リアル５０代だしねえ……。

原因不明だけど、それを解明できれば自分にも転用できるかも！？　と師匠は思ったらしい。

だから、当初は師匠としてではなく、迷子（研究材料）の保護者だった。

それが師匠になったのはいつからだったっけ……？

確か、ハンター試験の２８３期の試験官に師匠がなった時だから、拾われてから一年くらい過ぎた辺りだ。

わかる人はこの説明でわかったかもしれないけれど、実は原作が始まる五年前に私は落ちてきたんだ。
主人公のゴンたちがハンター試験を受けるのは２８７期なわけ。

それに気がついた私は、原作となるべく関わらないでこの世界を生きていこうと思った。
普通、原作のキャラたちと積極的に関わるんじゃ？　とか思う人もいるだろうけど（実際、重要人物の一人ビスケの世話になっていたわけだし）、私はなるべく原作はそっとしておきたいんだ。
自分が関わったせいで、話が横道にそれるとか面白くない。

あ、もちろんキメラアントは何とかしたいけどさ……。

元の世界に戻れれば一番いいけれど、最後の記憶がアレだから戻っても多分死んでる気がするんだよね……
それなら、この世界でハンターになって生活していったほうが楽しそうだし。

弟子にしてくれないだろうなーと漠然と思っていた私だったけど、頼んだらあっさり許可もらえた。
むしろ、「いつになったら弟子にして下さいと言ってくるかと思っていたわさ」と呆れたように言われたっけ。

それからは、師匠とは色違いのゴスロリ服を着るようになった。
黒と白のコントラストのドレス。やたら長いストレートの黒髪と合わせて、暗いところで見たら軽くホラーだ。

もちろん、これは師匠が用意したもの。
弟子になったら、着せたかったらしい。

――ちょっと、後悔したのは秘密……。

弟子卒業試験のはじまり　前編

私は師匠のお世話になった時からずっと、家事やちょっとした雑用を一切引き受けている。
それくらいしか、当時の私にはできることがなかったからだ。

弟子になったばかりの頃は、そんな風に保護されていた時とあまり変わらなかった。
まあ、見た目が変わったことくらいで……。

しばらくの間は、体力をつけることと、それにプラスして、身が守れない私のために護身術を教えてくれた。
格闘のかの字も知らない者に教えることは、とても苦労したんじゃないだろうか。

ん……？

そう考えると、手が掛かり過ぎるから自力で何とかさせるために弟子と称させたんじゃなかろうか。
なんか、納得できるあたり、ちょっと悲しい。

念のことも、話にもでない。

別にそれは想定の範囲だったので、「ああ、やっぱり教えてはくれないんだなー」と思っていたし、ハンター試験に受かったら改めて習えばいいやと簡単に考えていた。

……のだけれど。

自分が思うようには、この世界は回らないらしい。

その日は、当時の常宿にしていたザバン市のホテルから一人で買い物に出かけた。

買い物と言っても、師匠お気に入りのジュエリーデザイナーに頼んでおいた指輪を引取りに行くという単なるお使い。

だから、そう言えば原作はここがハンター試験会場になるんだよなあ……なんて思いながら、警戒もしないで人気のない道を歩いてた。

そんな時だった。

師匠を恨んでいたヤンが現れたのは。

可愛がっていた弟子を師匠が殺したから、ずっと復讐する機会を伺っていたそうだ。

恨む……と言っても、それは逆恨み。

だって、その弟子は賞金首になっていたんだ。大量殺人者として。

師匠が殺したのも不可抗力だったらしいし、私が弟子になるはる

か前の話で私は知らなかったのに。

嫌な笑みを浮かべてそれを私に伝えると、私に襲いかかってきた。
それは突然のことで、対処の仕様がなかった。

この時の出来事は今も思い出したくはない。
何も鍛えてない頃の自分だったら、その一撃に耐えることも出来ずに死んでいたと思う。

幸運だったのはそれだけでなく、戻って来ない私を心配した師匠が探しに来てくれていたこと。
ヤンは、師匠がきたことですぐに姿を消した。

悪意ある念による攻撃で無理やり開かれた精孔、目の前に迫る死。

もちろん、師匠は慌ててそれを御する方法を教えてくれた。

それでも、自分の中のワースト体験Ｎｏ．２だ。
？１は、飛行機事故に決まっているけれど。

そして、やっと念の修行も組み込まれるようになった。

で、前回の冒頭のようなやり取りも日常的になって。

……そんなこんなで、さらに一年近く経った。

べ、別に修行を説明するのが面倒で飛ばしたとか、そういうわけじゃないよ？

大体やってたことは、ＧＩ編のゴンたちと一緒だったし。

少し違うのは、私が女だからオンナならではの処世術を色々と教えてもらったことかな。

見た目に騙されるオトコはそれだけ多いってことだ。

確かに、今の私の見た目なら自慢じゃないが色々と騙せそうな気がする。

師匠の念能力の恩恵に与れて本当に良かったと思う。

ムダに長くて染めるのが面倒で黒かった髪も、奇跡のキューティクルのサラサラツヤツヤで天使の輪まできれいにできてるし。

デスクワークばかりだったせいで日に焼けていないだけだった肌も、若返ったせいと手入れで白い上にプルプルでツルツル。

規則正しい生活とクッキィちゃんのおかげで素晴らしいクビレになったし。

それに、メイクの腕だって上がった。

あ、美容関係ばかりでなく、ちゃんと能力も上がったよ？

「さてと。それじゃ、そろそろ卒業試験するわさ」

「え……？」

それは唐突だった。

根城にしていたヨークシンシティの師匠の別宅（何個目かは忘れた）で、朝食の用意をしていた時だったから。

「天空闘技場って知ってるかい？」

「あ、はい。パドキアの端にある格闘のメッカとか言われてるところですよね。観光客も多い」

フライパンから目玉焼きとベーコンを皿に出して、トースターから程良く焼けたパンを並べて、冷蔵庫に作り置きしておいた生ハムとトマトのマリネと新鮮なレタスのサラダを添えた。

「そこに行って、闘技場内で開催されてる四季大会のどれかで優勝しといで」

「は……？」

グラスに注いでいた牛乳を危うく床にぶちまけそうになった。

いや、だって唐突にとんでもないこと言うんだもの、驚いて当然だよね！？

弟子卒業試験のはじまり　後編

「師匠……私、強化系じゃないよ？
なんだって、そんな所に行かなくちゃいけないんですか」

ちなみに、私の系統は困ったことに特質系。
水見式をしたときは、葉っぱが真っ赤になってから消えた。

たぶん、異世界からきたせいだろうなあと自分は思ってる。

「あのねえ……。
あんたは、あたしと同じく念能力は戦い向きじゃないからその分自分の力の底上げしないといけないの。
だから、格闘技術はきちんと教えたでしょうが」

「それでも、優勝だなんて……無理に決まってるじゃないですか」

「四季大会はね、その名前の通り、春夏秋冬の各季節に一度だけあるんだわさ。
天空闘士なら誰でも参加希望は出せるけど、その希望者の中から一部しか選ばれない」

「じゃ、ますます無理じゃないですか。私選ばれるわけが……」

「話は最後まで聞くんだわさ。

闘技場にとってチケットが高く売れたり、話題になったりする闘士しか選ばれないってことだわさ。
女性闘士なんてほとんど居ないから、確実に選ばれるのは間違いないわさ」

「はあ……」

「で、その優勝の副賞品。パラダイスレッドっていう宝石が贈られるんだわさ。
協賛企業にジュエリー・グランマニがついてるからね。
全く勿体無い話だわさ」

……なんか、見えてきた。
要するに、その宝石が欲しいから行ってこいってことなんだろうか。

「師匠。それ単に宝石が欲しいけど、自分で戦うのは面倒だから私に行って来いとか言うんじゃないですよね」

「……ソンナコトハナイヨ」

図星か。

「私、今年ハンター試験受けるんですよ？」

そう。

今年の２８５期で受けないと、来年はヒソカが受けるし再来年は原作組が来る。

関わりを持ってしまうからそれだけは避けたい。

「途中で受けに行けばいいわさ。申込みは、もう済んでるんだろ？」

「まだしてません。時期近くなったら電脳ページで申込みしようと思っていたし……」

「なら、さっさと申込みしちゃいなさい。
あんたは、あたしの弟子だからね。ナビゲーターを見つけなくても会場までは行けるんだわさ」

「え……そうなの」

驚いた。
ナビゲーター見つけるの大変だなーとか、今回の会場の街は何処だっけとか色々考えてたんだけど。

そんなにあっけなくていいのか、ハンター試験。

「中にはわざとそれを教えない捻くれた師匠もいるけどね。
自力でそこまで辿りつけってね。
あたしも、あんたじゃなかったらそうしてたけど」

なんだか、ちょっとだけカチンと来る。
それって自分が使えない子という認識な気がしてならない。

「バカにしてるわけじゃないんだわさ。
んー……とりあえず、最初に弟子卒業試験に天空闘技場にいけって言った理由から説明しようか？」

不服そうな表情を浮かべていたのを見て取ったのか、師匠は半眼で言う。

「え、宝石が欲しいからでしょう？」

「それもあるけれど、違う。
あんた、暴力を奮った経験なんてここに来るまでないだろ。

何かを自分の手で殺したり、死体を見たりすることも」

「ええ、平和な世界で暮らしてましたからね……」

「敵意を持って攻撃してくる相手にあったこともないだろう？」

ああ、そういうことか。

敵意を持った相手に暴力を振るうことを慣れて欲しいということなのか。

「平和ボケって言ったら失礼だけど、スミキがいた世界は危険がなさすぎだ。

げんに、あんたはどんな相手にも手加減して本気でやれない。

だから、天空闘技場で慣れてからハンター試験を受けに行って欲しいんだ。

あそこならそれを日常的に感じることができる」

「師匠……」

「幸い、今回の会場はパドキア共和国のバルパラッドだから天空闘技場からも近い。

それでも行きたくないかい？」

そこまで言われたら、文句のつけようもない。

私は、無言でため息をついた。

弟子卒業試験のはじまり　後編（後書き）

捏造オリ設定が今後増えていきます。

飛行船で天空闘技場へ　1

１９９４
１２月末　ハンター世界にトリップ。ビスケに保護される。
（年末年始の休暇を利用してイギリス旅行する予定だったっけ）

――――――――――――――――――――

１９９５
（原作）　キルア、天空闘技場に初挑戦。
（原作）　ＧＩで、集団でカード収集する組織（ハメ組）設立。
１０月　ビスケ、２８３期ハンター試験の試験官に内定。弟子入り。

――――――――――――――――――――

１９９６
（原作）幻影旅団、クルタ族を襲い緋の眼を略奪。
１月　２８３期ハンター試験。
５月　ヤン襲撃。念を覚えた。
１２月　念修行がＧＩ編のゴンたちと同じクラスに。

――――――――――――――――――――

１９９７
（原作）キルア、天空闘技場にて２００階に到達。
１０月　ビスケから弟子卒業試験を言い渡される。↑☆イマココ

！！

「うーん……ハンター試験までは登録して……登録抹消にならない程度に戦えばいいか」

カレンダーと日記（覚えてる限りの原作のことなんかも書いてある）をにらみながら、私はつぶやいた。

今日は一日好きに過ごしていいと言われたので、自室に戻ってベッドに横になっていた。

食べてすぐ寝ると太る？

ちゃんと片付けはもちろん、日課の家中の掃除や洗濯も終わらせてからに決まってるじゃないか。

……あ。

今年って、キルアが天空闘技場にて２００階達成する年だ。

たぶん、もう家に戻ってるはずだから、ニアミスするとか無いよねえ……。

こんな所で、原作に関わっちゃうのもちょっと困るし。

ハンター試験は、毎年一月。
だから「今年」の試験というのは正確には「来年」の試験だ。

今は、十月。

今朝の師匠の話からすると、天空闘技場の四季大会のうち春夏の大会はすでに終わっているはず。
とすると、残りは秋冬だけれど時期が問題だ。

秋はおそらく今月だけど、冬はいつになるんだろう？
十二月に大会があるならそれは避けたい。
翌月に試験が控えているし、その前に怪我をするのも癪だし。
やりたくないことは先延ばしにしたいのに。

『あんたは、どんな相手にも手加減して本気でやれない』

ゴロゴロしながら、師匠の言葉を反芻する。

自分は、結構痛みに鈍感だ。

下世話でぶっちゃけた話だけど、毎月来るアレとか酷いときは意識失ったり倒れたりするほどひどい痛みを耐えてたせいだと思う。

こっちの世界に来てからはそういう痛みとは無縁になったから、良かったなあ。
この辺はホント実際にそういう人じゃないとわからないだろうけどさ。

だからと言って他人の痛みに鈍感なのかというとそうじゃない。
人が痛みを抱えている姿を見るのは苦痛。

だからこそ、自分が全力を出して相手を傷つけたら、その痛みはどれくらい？　って考えると怖くてできない。

「それを直せってことだよね、きっと……」

師匠としては、私を死なせたくはないんだろう。

ハンター試験中の死傷率は異常とも言えるものだし、新人の合格率は3年に一人。
本試験会場に自分は師匠のおかげでナビゲーターも探さずに行けるけれど、会場についたもののうち9割は一次試験で不合格。
それ以後の試験内容だって、試験官によっては受験者同士で殺しあいを公然とさせるものだってある。

自分が最初に会得した念能力は、本当に戦いには向かない。
師匠はそれを知っているから、オーラ総量を増やす鍛錬をしてく

れたわけだし。

いつかは、戦闘にも使えるような発を作ってはみたいけれど、あまり気が進まない。

……ちょっと不安になってきた。

私、本当にハンター試験受けても大丈夫なのかな。

「いや、大丈夫なはずだ！
念を知らない人だって受けてるんだし、大丈夫」

自分を励ますように声を出す。

明日には、この少しは住み慣れた家を出ていく。
師匠が天空闘技場行きの飛行船のチケットを用意してくれていたから。

てか、準備良すぎだと思うんだ。
私が断ってたらどうするつもりだったんだろう？

断っても、無理やり放り込むつもりだったんだろうなあ。

また、ため息が出た。

飛行船で天空闘技場へ　2

荷物は大きめのカート式のトランクケース一つと、この世界に来る時に持ってきた肩掛けカバン。
中身は着替え（例のごとくゴスロリ……）と身の回りの細々としたもの。
あとは愛用の化粧品類。

この化粧品は、師匠の愛用品と同じものだけど、物凄くイイ。
スキンケア用の乳液にしても化粧水にしても、メイク用のファンデにしてもグロスにしても、付けた感じが違うし、香りもまるでアロマみたいで癒される。
人工の香料や肌に悪い添加物みたいなものは入ってない。
きっと念能力者が作ってるんだろうなあと、漠然と思ってる。

服と宝石、そしてこういう美容に関するものには、師匠はお金に糸目は付けない。
お金を稼ぐ手段がなかった私にも同じように買い与えてくれていたから。

「しばらくは、闘技場の外のホテルに泊まることになるだろうしね。持って行くといいわさ」

空港まで送ってくれた師匠に渡された封筒はかなり重い。
中を見ると万札が束で入っていた。

「し、師匠……多すぎる気がします」

あまりの大金に、軽く目眩を覚える。

「それはパラダイスレッドの買取料だと思えばいいわさ。
だから、きちんと持ってくるように。
ま、そのくらいのお金があっても、あの辺のホテル代は高いからすぐに１００階クラス以上にならないとお金は尽きるよ」

ニコニコと笑みを浮かべて、恐ろしいことを師匠は言う。
この金額がすぐ無くなるとか、どんなぼったくりホテルだ。

「安い闘士用のホテルは物騒だし、不潔だからね。
セキュリティのしっかりした観光客用のホテルとなると高いんだわさ」

「ああ、そうなんですか……」

納得はしたものの、原作でズシとウィングが泊まってたホテルはどのランクに入るんだろうと頭の片隅で思う私がいた。
あれ、観光客用だったのかなあ……。

「それと、ハンター試験の時には数日前に迎えが行くように手配しとくから」

申込みも済ませてあるし、あとは時期が来るのを待つだけか。
そんな風に思いながら、師匠の顔を見ると浮かない表情を浮かべてる。

「スミキ。一人だから……もしかすると、またヤンが襲って来るかもしれないけど」

念を覚えるきっかけになったアイツ。

「大丈夫ですよ」

思い出したくもない相手だけど、次に会ったときは師匠のためにも決着を付けないと。

私は、にっこり笑って手を振って、搭乗ゲートへと向かっていった。

「……暇だわ……」

ぼーっと部屋の窓の外を見ながら、そんな言葉がつい口から出る。
元の世界から持ってきた本はとうの昔に読んでしまったし、こっちの世界の文字は読めはするけれど活字として読む気にはなれない。

これから四日くらい空の旅である。

元の世界の飛行機と違い、飛行船の速度はゆっくりだ。
目的地までだって、時間がかかる。

「……船内でも見てまわろうかな」

部屋においてあった飛行船のパンフレットを持って、部屋から通路に出た。

船旅とか最低ランクだと雑魚寝になるから、それを自分は覚悟していたんだけど、師匠がくれたチケットの船室は、一人部屋だった。
普通のホテルのシングルルームより多少狭いけど、飛行船だしそれも仕方ないし、一人で泊まるにはちょうどいい。

何よりも、シャワールームが付いてるのが嬉しい！

飛行船内にも大浴場があるから、そっちで入ればいいんだろうけど部屋に有ると無いとじゃやっぱり気分的に違いがある。

「何処から見てまわろうかなあ……」

個別客室フロアから共有フロアに移動しようと、パンフレットをめくりながら歩く。

……この時、ちゃんと前を見て歩いていればよかったと、のちのち私は後悔することになる。

飛行船で天空闘技場へ　3

パラパラとパンフレットをめくる。

ロイヤルスイート、スイート、セミスイートは各1室しかなくて、船の中央の階層の前方の見晴らしがいい部分にある。

カードキー対応だし、バス・トイレ・冷蔵庫・テレビ・ネット環境までついてる。

無料のアメニティが揃ってるし、おまけに毎食の食事もルームサービスで無料。

それから少し落ちて、デラックスが３４室。中央の階層の後方とその上の階層の前方部分。

次いで、一等客室が６８室。デラックスルームと同じ階層の後方部分と下層の前方部分。

うち、シングルルームが１５室で、自分の客室はこのクラス。

この下のランクからは個部屋ではなく、上下セパレート2段ベットの寝台、そして最低ランクの雑魚寝。

「師匠には感謝しないとなあ……ほんと……」

覚悟はしてたとはいえ、実際に個室じゃなかったら、こんなに落ち着いてなかっただろう。

ええ、中身はアレだけど、見た目は美少女。……自惚れじゃないはず。

メイク変えたせいもあるとは思うけど、最初の頃の軽くホラー印象の自分はどこいった。

コホン。

まあ、それで貞操的な意味で襲われることとかも考えないといけない訳。

別に負けるとは思ってないんだけど、転生モノや異世界召喚モノなんかでつきものの「いきなり最強！！」なんてチートとは私は無縁だからね。

地道にコツコツだよ、うん。

まあ、それはそれとして、続き続き……

共有フロア……パブリックスペースには売店・展望ラウンジ・展望レストラン・ミニシアター・ゲームコーナー・喫煙ルームがあるみたい。

売店は、おみやげとか軽食なんかを売ってる。
食事は別料金だったから、レストランよりココで買って食べたほうがいいかな？

ラウンジとレストランは中央の階層の最後尾。
大きな窓の外をゆったりと流れていく景色を見ながらゆっくりできそうね。

レストランの見どころ……水晶でできた自動演奏のグランドピアノ？

水晶でできたグランドピアノだと……！？
なんて、ファンタジー。

元の世界で、アクリルとかガラスで作った自動演奏ピアノなら見たことはあるけれど、これは一度見ておかねば。

とりあえず、最初の目的地はレストランに決定。
軽食ですまそうと思ってたけど、ここで食事もしてこよう。

ミニシアターは古い名作映画が上映されてるのか。

この世界の名作映画ってどう言うのだろう？　ちょっと気になる。

ゲームコーナーと喫煙ルームは元の世界のソレと変わらないのか。

煙草の煙は私も嫌いだし分煙歓迎だけど、こっちの世界も愛煙家は大変だな。

モラウとか、煙草吸える場所が減ってて苦労してそうなイメージ。

思わずクスクス笑ってしまう。

――――――――バンッ

「……わっ！？」

思考の渦にハマり込んでパンフレットばかり見ていた私は何かにぶつかった。

そんなに勢い良くぶつかったわけではなかったのだが、受け身を取れずに尻餅をついてしまった。

こんな失態は、師匠にバレたら説教ものだ。

「ああ、申し訳ない！」

声と共に大きな手を差し伸べられて、私は顔を上げた。

個室の扉が開いてるから、その扉に私はぶつかったんだろう。
一つのことに集中するとそれに気を取られる癖もなおさないといけないな。

問題は……この手の持ち主の男だ。

体を隠すゆったりとしたマントのようなものを羽織ってる。
色素の薄い長い髪と薄紫色の切れ長の目がちょっと印象的。
そして高身長で若く、イケメンと言って間違いない。

師匠だったら、間違いなく瞳をキラキラさせながら、猫をかぶって対応するであろう相手だ。

「お嬢さん？」

見上げたまま軽く固まっていたからか、再度彼は私に声をかけてきた。

「あ……大丈夫です。一人で立てますから」

差し伸べられた手を断って、立ち上がってスカートの裾を払う。パニエで隠れてたから良かったけど、次からはもっと長いスカートのドレスにしとこう……。

「確認せずに扉を開けてしまって、本当に申し訳ない。私もまだまだ修行不足のようだ」

「いえ、単に前方不注意だった私が悪いので、そんなに気になさらなくても？」

身長差がかなりあるから、私は自然と見上げる形になって上目遣いになる。

なんか、見覚えがあるんだよね。この人。

どこでだっけ……？

なんか、引っかかってるんだけど思い出せない。

「えと、ケガもないですし……これから食事に行くので、失礼しますね」

落としたままだったパンフレットを拾い上げて、ペコリとお辞儀をする。

うん、引っかかりがあるってことはきっと原作関係者。
関わり合いになっては駄目だ。

早々に撤退せねば。

「ああ、私も行こうとしていたんですよ。よろしければ、御一緒させて下さい」

ヤバい、変なフラグ立てちゃった？

飛行船で天空闘技場へ　4

目当てだった水晶の自動ピアノと外の景色が両方見えるテーブル。

ピアノは照明で輝いていて、本当に綺麗だ。

自動演奏のＢＧＭも雰囲気にあっていて落ち着く。

このレストランは、きっと観光客用なんだろう。

――――――そして、そんな私の斜め隣の席には、微笑を浮かべるイケメン。

なんてベタすぎるシチュエーション！

何処の乙女ゲームかっ！？　と喜ぶべき（？）ところだけど。

「……どうしてこうなった」

引きつった笑みを浮かべながら、隣に聞こえないくらいの私の独り言。

でも、まさに私の魂の叫びだ。

この時期に原作関係者なんていないと踏んでたのに。

何か、年表の確認ミスでもしていたのだろうかと頭が痛くなる。

変なフラグは破壊するに限ると同行は断ったのだが、ケガをさせそうになったお詫びに食事くらいはご馳走させて欲しいと言われたのだ。

食事代が浮く……！　とか思って、思わずＯＫした私にはバカの称号を与えざるを得ない。

「そういえば、まだ名乗ってもいなかったね。
私はカストロ。
キミの名前も教えてもらえないか？」

カストロだとぉ？

天空闘技場で、ヒソカと戦って念を覚えて、その後メモリの無駄遣い方向に修行したせいでヒソカに殺されたあの？

やっぱり、原作関係者じゃないかぁぁぁぁ！

ああ、この場で席を立って、見なかった・聞かなかったことにしたいっ

「……スミ…キ…です」

本当にどうしてこうなった。

「スミキさんはどちらまで向かわれるのかな。
途中寄港するラジェスタ？　それとも、天空闘技場まで？」

「え。えーと……」

少し迷ったあと、素直に目的地を私は口にした。

「このまま、天空闘技場まで行きます」

「それは奇遇、目的地は一緒のようだ。観光で？」

もうね……。なんなの。

なんで、そんな嬉しそうな微笑み浮かべてるの、カストロ。

お前、格闘家として腕を上げて名を残すために闘技場に向かってるんでしょ？

こんな所でナンパしてないで、ちゃんと精神修行しなさいよ。

若干ロリコンの趣向でもあるんですか。

貴方にふさわしい派手な美人辺り口説きなさいよ。

それとも、自分の魅力に振り向かない女はいないとか思ってるわけ？

確かに、原作でもヒソカ戦前に花束たくさんもらってたし、さぞやおモテになられていたんでしょうが。

そんなんだから、ヒソカに負けるんだよ。

心中ではこんなことを思いながら、必死に笑みを浮べている私。

はたから見たら、微笑を浮かべて和やかに談笑する二人に見える辺りが色々と終わってる気がしないでもない。

「まあ、そんなところです」

常に笑顔で相手をだませ！　としつこいくらいに師匠には言われていたけれど、流石にもう顔がひきつりすぎて無理。

早く、オーダーした料理よこい。

速攻食べて部屋に逃げる。

これ以上関わりたくない。

結局。

その後、料理が来るまでに散々色々聞かれたのだが、ほとんど上の空で対応した私は悪く無いと思う。

……何聞かれたのかすら覚えてないけど。

もちろん、さっさと食べて礼を言ってから有無を言わさず一人で部屋に帰った。

部屋まで送るとも言われたけれど、丁重にお断りしたのは言うまでもない。

↓ＳＩＤＥ　カストロ

「お詫びに、食事くらいはご馳走させて欲しい」……この言葉で、ようやく彼女は私の同行を許してくれた。

篭った空気の入れ替えに扉を開けた瞬間、人がいたことに驚いた。

気配を感じなかったはずの通路にいた少女。

名前はスミキというらしい。

黒を基調としたレースとフリル・リボンに飾られたミニスカートのドレス。

そのスカートから伸びるほっそりとした足には、薔薇の飾りがついたガーターベルトつきの白ストッキングと編み上げの黒いブーツ。

腰まで伸びたストレートの黒髪に白い薔薇の飾りのついたヘッドドレス。

見た感じ、１５～１６歳くらいだろうか。

服装はともかくとして、かなり美しい少女だ。

思わず、手を差し伸べて謝罪したのだが、困惑した表情を浮かべて足元に座っていた。

女は大概こうやって紳士風に振る舞えば、嬉しそうな反応をしたものなのだが……。

どうも、この少女は自分が知るうるさい女たちとは違うようだ。

むしろ、自分を避けようとしている気がする。

今までにない反応だ。
面白い。

飛行船で天空闘技場へ　４（後書き）

カストロさんはスミキに興味を持ったようです。
私の中では、彼はいいとこのボッチャンで家出して修行してるイメージ。

スミキ自身は師匠の男好きでミーハーに騒ぐのを間近で見ていたのでその方面の気持ちは枯れ気味です。

天空闘技場　1

最悪の出会いから四日。

途中、食材や燃料の補給に別の街に寄港したりしつつ、ようやく天空闘技場についた。

またカストロに会うのも嫌だったので、個室でヒッキーになっていたのは秘密。

せめて、一度くらい大浴場や展望ラウンジにも行きたかった……。

それもこれも、アイツが悪い。

個人的な面識は作りたくないのに。

飛行船のターミナルが闘技場と直通になっているので、そのままトランクを引いて受付のロビーに向かう。

天空闘技場は２５１階、高さ９９１ｍの世界第４位の建物。

格闘のメッカとも呼ばれる闘いの場所。闘いは全てギャンブルの対象になるから、観光客も多い。

観戦受付ではなく、選手受付の方のフロアに向かうと、かなり混雑していた。その中でも人が少なめの列に並ぶ。

周囲を見回すと、本当にむさ苦しい男ばかりでちょっと辟易する。

私のような少女が選手登録用の受付に並んでいるのがよほど珍しいのか、あちこちからザワザワと何か言われてるのが聞こえるが気にしないでおこう。

実際、見た感じ女の人いないしねえ……

「天空闘技場へようこそ。必要事項をこちらにお書き下さい。裏面にも要項がございますので、そちらはお読みの上でサイン下さい」

手渡された用紙の空いてる欄を埋めていく。

えーと。

名前……名字まで書かなくていいか。スミキだけでいいや。
年齢……実年齢書いても信用されないしなあ。１６歳にしとこ。
出身地……どうしよう、私ここの世界の人間じゃないし。空欄で出しちゃえ。
格闘技経験……師匠についてからだから、３年くらい？
万が一死亡した際の連絡先……多分そんなことはないとは思うけど、師匠の所でいいか。

裏面には、要約するとここで負った大怪我や死んだ場合に闘技場及び、対戦相手に損害賠償責任を求めないという誓約書。

ああ、まあそうだよね。
毎日のように対戦があるのにそれで責任とか求められてたら、いくらお金があっても足りないし。

納得しつつ、一番下の「意義を申し立てません」という欄に丸をつけて、名前を書く。

「難しい条件は一切ございません。
手段を問わず、相手を倒した方が勝ちとなります」

記入した書類と引換にハガキサイズほどの番号の書かれた紙を渡された。

番号は１９７６番。

「そちらの番号がアナウンスにて呼ばれましたら、リングに上がって下さい。
こちらに当施設の案内と選手規約がまとめてございますので、お待ちいただいている間にお読み下さいませ」

手帳サイズほどのパンフレットを渡された。
軽く開いてみると、細かい文字がぎっしり書かれている。

これは、読まない人のほうが多い気がする。
失礼だとは思うが、ここに多そうな脳筋タイプは絶対読まずにゴミ箱行きだ。

その証拠にさっきゴミ箱の可燃物の方に、このパンフレットが山と入っていたことは記憶に新しい。

そういえば、カストロも受付済ませたのかな。
顔を合わせなくて、ちょっとほっとするけれど。

そのまま歩いて観戦席の方に移動する。

選手控室にいてもいいのだけど、殆どの人は観戦席に来てる人のほうが多いみたい。

最後列の端の方に座る。

リングの数が1、2、3……16個？
3分の闘いとはいえ、これは時間かかりそう……。

待ってる間に、折角だからパンフレットを読む。

初めは一階から闘い５０階以上は一勝ごとに１０階ずつ上がって、負けると１０階下がる。
１００階以上で個室が貰えて、２００階以上で武器の使用が認められる。
もらえる賞金も、上層階に行くほど高くなる。

原作通りだ。

闘技場自体に低価格の選手用のホテルがあること。
観光客用のホテルは闘技場の外にあること。
１００階以上でもらえる個室には、ルームサービスもあること。

あとは、２００階以上の待遇の素晴らしさとか。

まあ、一番驚いたのは、選手用の規約。

闘技場のリング以外の場所での私闘は禁じられてるんだね。

原作の方では、サダソとかキルアがそれっぽいことしてたけど、いいのか、アレ……
まあ、ヒソカとかは、そんな規約すら気にしてなさそうだけどさ。

隣の席に誰かが座った気配がした。

まあ、空いてるし別にいいけど。

「やっと、見つけた。探したよ」

は？

思わず顔を上げて、絶句した。

笑みを浮かべたカストロがそこにいた。

「……よく見つけましたね。こんな超人数の中で」

ほんと、どうやって見つけたんだよ。

こんなに人がいっぱいの中で。

「割と簡単だったが？　目立つ格好だし、女性自体少ないからね」

あー、はい。そうですか。

もう、コレで対戦相手がカストロとか出来過ぎた状況でも、私は仕方ないと思える。

フラグを叩き壊そうとしたから？

さすがにそれはないだろうけれど。

「観光は嘘だったんだね。こちらの席に座っているということは、選手登録だろう。
どうして嘘を？」

私の手元の紙を見つつ、カストロが言う。

あー、もうめんどうだなあ。

私はどう説明するか困って、彼を見上げていた。

天空闘技場　1（後書き）

捏造設定いっぱい。
カストロさんがストーカーチックに。

天空闘技場　2

「そうですねえ？　正直に話したら、私のことほうっておいてくれますか？」

もう、最後の手段だ。

ここまで執着されるように興味持たれるとは思ってなかったし。

「それは無理かな。私としては、キミのことをもっと知りたい」

イケメンのさわやかな笑顔と、この言葉はある意味破壊的なんだろうけれど……

私には通用しない。

というか、相手がカストロなので余計にだ。

むしろ、イラッ☆とさせられる。

「たかだか、飛行船内で出会っただけですよ？

そんな探しまわったり、嘘をついていたのはなぜか？　なんて聞いたりする必要性なんて無いと思いますが」

軽くため息をつきながら、パンフレットを閉じてかばんにしまう。

「今までそんな態度を取られたことがないのでね。どうしても気になるんだよ」

のれんに腕押し、糠に釘？

こういうフラグイベントというものは普通、主要のイケメンキャラとかと発生するものであって、一応分類としてはイケメンではあるものの、残念極まりない「捨てキャラ」と発生するとか私どれだけ不運。

「それは、自分自身に絶対的自信を持ってて、なびかないのは居ないとか思ってるからでしょう？

私みたいな変わり者は少なからず居ますよ。

それよりも、ここへ来たということは、貴方は格闘家として腕を上げて名を残すためでしょ？

私みたいなのに声をかける暇があるならその時間を鍛錬に使うべ

きだと思うんです」

とりあえず、話題をすり替え。
正直に話したところで、根掘り葉掘り聞かれそうだし。

「そして、私は貴方みたいなタイプは大嫌いですから」

「……」

あー。
プライドが高そうだから、逆にやばかったかな。

こういう態度取られるとか珍しいんだろうねえ。
言い寄る方が多そうだし。

でも、はっきり言わないとグダグタと長引きそうだし……

「……ハハハハハ！！」

あ、壊れた……？

いきなり大笑いしはじめたカストロに周囲の視線がこちらに集まってしまう。

ちょ、これはかなり恥ずかしい！

「ふう……。
はっきり言ってくれるね、スミキ。
キミは、本当に面白いよ」

「面白いですか？
普通だと思ってますけど」

「ますます、キミのことが知りたくなった。
それで、嘘をついた理由は私が嫌いだからでいいのかな？」

「え。ええ……」

「マイナスからのスタートか。それならそれ以下になることはないわけだ。
これからはプラスになるように頑張るとしよう」

「いや、え……えぇぇぇ？」

何だ、コイツ。

カストロってこんな奴だったっけ。

プライドが高いわりに雑魚っぽいどうでもいいような印象しかなかったんだけど。

しかも、元の世界でむかしやってたアニメではヒソカ戦はいろいろ放送コードに引っかかっちゃったせいでサックリ削られたくらいの扱いなのに。

ポジティブシンキング、プラス思考どころの騒ぎじゃない。

ドMすぎる。

もう残念ドMと彼を心の中では呼ぶことが決定した。

というか、原作関係者と関わらないで生きるはずだったのに……ったった一度の前方不注意でこんなことになるなんて。

後悔してもしきれない。

『１８９０番、１９７６番の方Ｊのリングまでどうぞ。１８９０番、１９７６番の方Ｊのリングまで……』

丁度良くアナウンスが流れた。

自分の番号が入っていたのは天の助けと思いたい。

この残念ドMは放っておこう。

私は無言で荷物をまとめると、中央の闘技場フロアへの階段を降りていった。

闘技場フロアに入り、入り口の係員に荷物を預ける。

１階は、レベル判断のためだから荷物を持ったまま来る人も多いので、こういうサービスがある。

他の階では預ける場所がないので、手荷物は持ち込めないらしい。

電光掲示板の表示を頼りに、Ｊのリングに向かう。

「両者、リングへ」

審判の声にリングの中央へと足を進めた。

対戦相手は、自分の二倍くらい縦と横の幅がありそうな巨漢。

「おい、見ろよ。かわいいお嬢ちゃんだぜ？」

「きゃー、戦えませーんなんて、黄色い声出すんじゃねーぞ」

「でかいの、相手が良かったな！！」

「楽勝だろう」

外野のヤジうぜー……

「むしろ泣かせたいだろ。いい声で泣きそうだぜ？」

「ベッドで啼かせたいの間違いだろ。ははは」

……セクハラ混じりのヤジきたこれ。

この辺は定番なのか。

「ここ一階のリングでは入場者のレベルを判断します。
制限時間3分以内に自らの力を発揮してください」

「3分？　3秒だな」

どっかで聞いたセリフ。
原作でも、ゴンが言われてた気がする。

「それでは……はじめ！！」

天空闘技場　2（後書き）

どんどんおかしくなるカストロさん。
ファンの人、ごめんなさい。

天空闘技場　3

審判の開始の合図と共に、相手は両手を広げてこちらに走ってくる。

恐らく、リング外へ押し出すつもりなのだろう。

殴ろうとしてこない所に少しだけ？　好感を持てる。

十分に引きつけてから捕まる寸前にそれを避け、背後に回りこむ。

虚をつかれた相手がこちらを認識する前に、跳んで首筋に軽く手刀を当てた。

手加減しているから、骨折したりはしないはずだけどショックで気絶はするはず。

力加減は間違ってないはずだ。

予想通り、対戦相手はそのまま倒れこんで動かなくなった。

軽い罪悪感が自分を支配する。

「……ごめんなさいね」

聞こえては居ないと思うけれど、なんとなくつぶやかざるをえない。

「うぉぉぉぉぉ」

「一発で倒しちまいやがった……」

「なんだあの嬢ちゃん!?」

「やべえ、俺殺される……とんでもないこと言った……」

外野のヤジが歓声に変わってる。

他にも色々聞こえるけど、多分、殺される発言はセクハラやじを飛ばしてきた奴だろう。

声が聞こえた方に、にっこり笑ってあげよう。

「……コホン。せ、１９７６。

キミは５０階。がんばって下さい」

放心していた審判が、ようやく気をとりなおして手元の機械を操作して、バーコードのような模様の入ったチケットを渡された。

それを受け取ってリングを降りる。

このチケットを５０階の選手受付に持って行けばいいのかな。
でも、そうすると次の試合が組まれちゃうよね。

パンフレットにはなんて書いてあったっけ？

ま。この分なら、２００階前後くらいまではトントン拍子で行けそうかな。

荷物を返却してもらって、トランクを引きながら考える。

それにしても、残念ドＭ……もとい、カストロがああいう性格だとは思わなかった。
プライド高そうでナルシーそうではあるとは思っていたけど……ねえ。

確か逆算して、年表的に考えると来年の2月か3月辺りだっけ。
２００階に到達して、初戦でヒソカと戦うのって。

それまでには、大会出て優勝しないとなあ……

とりあえず、５０階の受付行くのは宿確保してからかな。
荷物もあるし。

闘技場の外に出ると、そこは石畳の広場になっていた。

中央には天空闘士をモデルにしたらしい、筋肉質の半裸の像がありその周りには噴水がある。

その噴水を囲むようにして、宿泊ホテルの相談所やグルメガイドブックを並べた店、いわゆるジャンクフード的なものを売る露店が並んでいる。

足元に風で飛んできた紙を拾い上げると、闘技場の有名選手のインタビューや見どころのある新人等を紹介する新聞のようなフリーペーパーで、本当に街全体がこの闘技場があって成り立っているんだなあと感心する。

宿泊ホテルの相談所でパンフレットを貰い、香ばしい匂いで食欲をそそられた何かの肉の串焼きを露店で買った。

……なんの肉だろうとちょっと考えるけれど、この美味しそうな匂いにはかなわない。

流石に立ちながら・読みながら・食べながらの三ながらはどうかと思うので、噴水の縁のレンガに座って串焼きを頬張る。

「うん……美味しい」

タレが元の世界で言う焼き鳥のタレみたいな。

肉自体も鳥のササミみたいで癖がなくて美味しい。

ちょっと気を付けないとタレがこぼれて服に落ちそうになるのが難点だけど。

今日泊まる場所を決めなくてはならないから、お腹も落ち着いたところでパンフレットを開いた。

この近くだと、エルモンドホテルって所が良さそう。
何とかっていう賞のサービス部門３つ星らしい。

こっちにもこういう格付けはやっぱりあるんだね。
ハンターにも格付けあるくらいだし。

チェンマホテルってところは、ゴルトー料理が美味しいのか。
ゴルトーって……韓国みたいなところだっけ？
辛い唐辛子系の料理なのかな？

師匠と出かけるときは、師匠が何でも決めていたし、改めて一人で出かけると新たな発見が多くて嬉しい。

そう言えば、パンフレットを読んでると何かのトラブルに巻き込まれてる気がする。
また何かあると困るから程々にしておこう。

パンフレットを閉じて、最初に気になったエルモンドホテルに向かった。

天空闘技場　4

師匠のありがたみを更にかみしめています。

案内された部屋はジュニアスイートのダブルルーム。

一泊、９万ジェニーなり。

……だって、他の部屋空いてなかったんだよ！

スタンダード（それでも一泊５万ジェニー）が希望だったんだけど生憎と予約で埋まっていて、ウォークイン……まあ、要するに当日客だった私は即金で支払えるならという条件で泊まれることになった。

悔しいから部屋代は５泊分前払いしてあるけど、これで貰ったお金は、ほぼ使い果たしたことになる。

元の世界でもそうだけど、ウォークインはホテルには結構嫌われる。

予約を前日でもいいから入れたほうがいい。

旅行が趣味だった私は、その辺にはかなり気を使っていたんだけど、すっかり頭から抜けてたんだよね。

いつも出かける時には師匠があらかじめに予約の電話をしてたことに気が付きそうなのに。

まあ、いい。次は気をつけよう。

宿も確保したし、闘技場に戻って５０階で受付しないと。

「……まで１０階単位でクラス分けされております。つまり、５０階クラスの選手が一勝すれば６０階クラスに上がり……」

パンフレットをちゃんと読めば、この説明はいらないんだけどなあ……と説明してくれるエレベーター嬢を見ながら思う。

「……お分かりいただけましたでしょうか？」

「はい。ちゃんと、パンフレットも読みましたから」

「あ、でしたら、説明はいりませんでしたか？　申し訳ありません。ほぼすべての方がお読みにならないので……」

ああ、やっぱりなー。

説明をこうやって聞かせるってことはそれだけアレを読まない人が多いってことか。

元の世界では、コスト削減でいなくなってしまっているエレベーター嬢だけど、きちんと読む人が増えない限りここでは現役のままだろう。

「毎回説明してるんですか？　大変ですね」

他に誰も乗っていないので、つい思ったことを口にした。

「皆さんが、ちゃんと目を通して下されば一番いいんですけれど、これも仕事ですから。

と……５０階です。がんばってくださいね」

苦笑を浮かべたエレベーター嬢に見送られて、私は降りる。

そのまま通路を通り、選手受付で1階で渡されたバーコード付きのチケットを渡した。

「はい、１９７６番ですね。こちらになります」

バーコードリーダー?に通してから、封筒を手渡された。

軽く振ってみるとチャリチャリと小銭の音がする。

「今すぐ試合登録もなされますか？　それとも、明日にいたしますか?」

なんだ、対戦日程は明日も選べたのか……

「今すぐでお願いします」

「かしこまりました。では、このまま選手控え室でお待ち下さい。お名前をアナウンスしますので、それからリングまでお願いいたします」

何か飲みながら待とうかな。

封筒を逆さにすると、１５２ジェニー出てきた。

ここの自動販売機の缶ジュースの値段が１５０ジェニーだから、確かに缶ジュース１本分。

原作通りだなあと納得しながら、冷たいミルクティーを買う。

「選手控え室……ねえ……」

一応、扉の前まではきたものの、なんとなく入りたくない。

放送自体は、この通路にも聞こえるので、結局外で待つことにした私だった。

『さあ、皆様おまたせ致しましたー！　次は美少女と野獣の組み合わせです！！
では、スクリーンを御覧ください！！』

対戦会場は５４階のＢリング。相手は、顔は髭面で体毛が濃く、手の爪をかなり伸ばした男だ。

スクリーンに1階で対戦した時の映像が流れた。

『スミキ選手は、見た目こそ可愛らしい少女ですが侮る事なかれ！体重２００ｋｇを超す巨漢を軽やかに手刀一閃！！　無傷で倒しました。

対するバルモア選手は、自前の鋭い爪と牙を武器とするまさに野獣！！
対戦相手を切り裂き、マットに沈めています！

さあ、皆様、ギャンブルスイッチはよろしいですか？

それではー、スイッチー……オン！！』

倍率は、当然だとは思うが、バルモアの方が低い。
ＶＴＲでの凶悪さと、見た目の印象からして。

まあ、そうだよねえ……。
自分でも、相手にかけそう。

これはちょっと真剣にならないといけないかなあ？

『おーっと、倍率はバルモア選手優勢！
やはり、あの切り裂く爪と牙が優位に働いたか？』

明確に人工の武器ってわけじゃないから使用禁止にもできないよねえ。
斬られると痛そうだし、噛み付かれたくもない。
……普通なら。

『それではー、3分3ラウンド！！　ポイント&KO制！！』

「はじめ！！」

ＶＴＲを見ていたせいか、相手は構えたままこちらに来る気配はない。
先に攻撃を仕掛ければかわされると見たのだろう。
1階の時の相手よりは考えているらしい。
それなら、こちらから仕掛けるだけだ。

微笑を浮かべて、ゆっくり相手に近づく。

『さあ、最初に動いたのはスミキ選手！！　不敵にも笑みを浮かべているようにも見られます』

私がこの闘技場で闘うにあたって自分で決めたルールが一つある。

できうる限り、相手を一撃で気絶させること

私は闘うことが嫌いだし、相手が痛みで苦しむ姿は見たくない。

ただ、実戦経験は数えるほどしか無い私だから、多分途中で上手くは行かなくなるとは思ってる。

その時こそ、師匠が言っていた「暴力への慣れ」が必要になるはずだ。

そのためには、もっと強い人を相手にしなければならない。

警戒してバルモアがその腕を振りかぶる瞬間に、左に避けて手刀を首筋へと叩き込んだ。

彼はその場に崩れるように倒れた。

「ヒットー！」

『でましたー！！　スミキ選手の一撃です。ヒットとダウンで2ポイント先取です。
皆様、御存知の通りポイント＆ＫＯ制とは……』

司会者が説明をしているけれど、たぶん相手は目を覚まさない。
原作のキルアの時は、ズシだったからこれが通じなかっただけだし。

さすがに、今回は罪悪感は感じなかった。

別に考え方が変わったわけじゃないよ？

相手がすでに(1階で)殺人まがいのことをしていたから、罪悪感が薄かったという。

今日は時間も遅いし……もう、帰ってシャワー浴びて寝たい。

一応、試合組まれているか確認したら、ホテルにもどろっと。

やがて、バルモアの様子の確認をしていた審判が相手の気絶を確認して私の勝利が確定した。

「6万ジェニー……5万ジェニーかと思ったんだけど、多い分にはいいか」

60階の受付で渡された封筒からお金を出して思わず呟いた。

「ああ、先月から進んだ階層の金額を受け取れるように改定されたんです」

私の独り言が聞こえたらしい受付嬢が教えてくれた。

「そうなんですか。パンフレットと違ったから、つい口にしちゃいました」

「きちんとパンフレット読んでくださってるんですね。読まない方ばかりだと思っていたので」

ここでもかっ！　本気で脳筋だらけすぎる。

契約書や説明書はきちんと理解してという言葉を送りたい。

私がそう言うのに人一倍うるさいからというのは置いておくとして。

「あ、そうだ。この後の試合って、私は組まれてます？」

「いえ。御希望でしたら組みますけれど、今日はもう無いようです」

確認してもらって安心する。

コレでホテルに戻ってシャワーが浴びれる！

「明日は午前１０時から試合がありますね。がんばって下さいね」

ふと、受付嬢の背後の壁にはられたポスターに目が行く。

「四季大会［秋］参加希望者受付中」と書いてある。

「あの大会って、いつなんですか？」

「今月末です。募集は今週末までですので、あと５日ですね。参加希望ですか？」

期日は、ほぼ予想通りだったけど、募集期間を失念してた。

あと５日以内に１００階まで上がらないと、参加無理じゃない？

「あれって、誰でも参加できるんですか？」

「いえ、これは２００階クラス以下と言う限定で希望者を募って、

こちらで参加者は厳選の上決められます。
詳しくはこちらに書いてありますので、お読みになられたほうが早いかと」

「あ、ありがとうございます」

「女性が出ると華がありますからね。是非ご検討下さい」

ポスターを縮小したようなチラシを渡された。

さすがにパンフレットタイプにすると、読む人が限定されるからチラシにしたのかもしれない。

ホテルで読んで、じっくり考えることにしよう。

天空闘技場　5（後書き）

9／4は投稿をお休みしてしまいました。

お気に入りに入れて下さった方、評価して下さった方、感想を下さった方、本当にありがとうございます。

日常シーン・スミキの心理描写が多めでいつ殺伐するんだと言われそうなんですが、そのうちに……っ

天空闘技場　6

「……どっちにしろ、これに出ないことには他の時にはチャンスはないか」

広すぎるベッド（ダブルルームだけどベッドサイズはクイーンだった）に、素肌にバスローブ姿で寝転びながら例のチラシを見て呟いた。

ちなみに、スイートルームと言うのは続き部屋という意味があって、居間と寝室にわかれた2部屋以上からなる部屋のことをスイートルームという。

ジュニアスイートはそれと異なって、居間となる空間と寝室があるけれど2つに分かれているわけではない。

そして、決定的に違うのは格式があるホテルならスイートルームは、ホテルが「上客」と認めない限り泊めない。

仮に部屋が開いていても「生憎と予約が入っておりまして……」と断られるのである。

この仕組み自体は、ここも元の世界も一緒だと思う。

元の世界では、最近だと経営難とかでスイートルームですら安いパックになってたりするんだけどね。

いつか、超高級ホテルのスイートルームに「自分へのご褒美（笑）」として泊まってみたいと思っていた私としては複雑。

ま、ランクは落ちて、ジュニアスイートといえど、高級なことにはかわりない。

エレベーターはカードキーがなければ通れないセキュリティエントランス式だし、フロア専任のコンシュルジュもいるし、専用のラウンジもあるし、ホテル内のプール・サウナも無料。

備え付けのアメニティも、有名ブランドのもの。

持ってきたものより値段の高い基礎化粧品がおいてあったから思わず使ってしまった。

調子にのって全身に使ってしまって、だいぶ量が減ってるけど、使いきる頃には新品に変えられてるはずだし、何より無料なのが良い。

でも、使い心地はやっぱり持ってきた奴にはかなわないな。

つけた後のしっとり感が違いすぎる。さすが、師匠が認める品質……。

ベッドは、マットレスも柔らかすぎず硬すぎず。きっと、ポケットコイル式のものと見た。

かけた気がしないほど軽い、しかしきちんと温かいキルトとかもかなり上質のものだし。

シャワーだけかと思いきや、バスルームはジャグジーになっている上に天空闘技場を含めた夜景を満喫できる絶景の大きな窓つき。

ほんと、部屋代が高いのだけがネック。

でも、個室もらえるようになっても、この極楽を知ってしまうと移動できる気がしない。

……ファイトマネー、ホテルの部屋代とかに消してもいいかな。

どっかのお子様みたいに菓子代で2億とかアホなことはしないし。

あ……。

なんか、思考がすごくずれてしまったけど、四季大会のことを考えよう。

２００階になったら、参加できなくなるのならさっさとエントリーしてしまうしか無い。

どうせ、１００階フロアくらいまでは楽勝のはず。

「……変なのと当たらないといいなあ……」

頭の片隅にあまり思い出したくない名前を浮かべつつ、眠りについた。

あれから3日。

私は１００階フロアにたどり着いていた。
何故か私は一日1戦、多くて2戦しか組まれないので結構時間がかかってしまった。

もちろん、全部一撃で気絶させて全勝してるけどね。

件の人物に会うこともなく１００階までこれたので、これはコレでよかったと言わざるを得ない。
ただ、その残念ドMもそろそろこのフロアに来ると思うので、まだしばらくは油断できないけれど。

そして、四季大会［秋］にも申し込んだ。

受付嬢にとても喜ばれたので「女性参加者は少ないんですか？」と聞いてみた。

――――聞かなければよかった。

女性参加希望者は、私だけ。

女性闘士自体は、私の他にあと数人いるはずなんだけどね。

さらに聞けば、自分の試合数が他の人よりも少ない理由もわかった。

どうも、観戦チケットにプレミアがついてしまって入手困難になりつつあるそうだ。

そのために、何度も闘技場に足を運んでほしいために、わざわざ試合数を減らして調整しているとのこと。

女性闘士自体が珍しいから、彼女達のカードの観戦チケットは高いのは知っていたけれど……。

ちょっと予想外だった。

四季大会も問い合わせも、かなりあったらしく「参加は確実でし

ょう」と太鼓判まで押された。

大会までに２００階クラスに移っても参加決定後なら大丈夫とのことだった。

「ねえ、隣の席いいかしら？」

１２０階にあるレストラン（闘技場のスタッフと選手のための社員食堂みたいなもので、観光客は入れない）でお勧め定食を食べていた私は箸を止めて、声の方を見る。

年齢にして、二十代前半から後半くらい。

金色の長い髪と青みがかった黒い瞳のアオザイのような青い服を着た目が醒めるような美人がそこにいた。

このアオザイという衣装は、ベトナムの民族衣装だけどチャイナドレスの亜種っぽく見える。

サイドに両スリットが入ったチャイナドレスに、ゆるい裾のパンツ（ズボン）をあわせたような。

生地によってはパーティドレスにもぴったりだったりするけど。

そんな余談はともかくとして、席は他にもあいてるのになんで私に声をかけてきたんだろう?

「別に構わないですけど……他にも席空いてるじゃないですか」

「ああ、貴女と話したかったの。スミキさん」

思っていたよりも、低めのハスキーボイスでそう言うと、彼女は手に持っていたトレイをテーブルに置いた。

天空闘技場　7

「あたしは、クラヴィス。１８０階クラスよ。女性選手って少ないでしょ？　だから、声かけてみたくなったのよね」

名前を聞いてちょっと吹きそうになった。

元の世界に、アンジェ○ークっていう某無双や野望シリーズで有名なメーカーが出してる乙女ゲームがあったんだけど、それの初期の頃に出てきた闇の守護聖の名前が確かクラヴィス。性別は男性。

でも、目の前の人はどっちかというと同ゲームの夢の守護聖っぽい上に、性別は女性だから、一緒にしたらマズイんだけどさ。

「そうなんですか。今まで、声かけられたことないんでびっくりしました」

「あらそうなの？　有名になってるし、１階の時、えーと……カストロ？　だっけ、アレに声かけられてたじゃない」

ナンデスト！？

あれ、見てたのか、この人。

「……ああ、あれはノーカウントにしたいです。色んな意味で……」

「新人に面白そうな子いないかしらって見に行って、見かけたのよねー。

彼も、イイ線いってるけどちょっと足りないわ。本当、惜しい」

青みがかった黒というか、濃すぎる青というか。

そんな瞳のクラヴィスと名乗った彼女は、クスクス笑いながらパンをちぎる。

「でも、あれってポジティブシンキングを越えた何かですよ？」

「前向きに考えられるっていいことよ？　ネガティブになるよりよっぽどいいしね」

さすがに、他人に向かって残念ドMと素直に言うのは一応はばかれるので、マイルドな言い方にしてみたけど、私はどっちかというとネガティブになるタイプなので、ポジティブすぎる人が苦手。

だって、絶対相手すると疲れるよ？

明るくて前向きでいいじゃないかって？　いや、それは見方を変

えると楽観的にしか考えられないということだからね。
悲観すぎるのも悪いけど、なにごともほどほどがいいのだ。

それに相手は一応原作関係者。触れるな危険。

「それにしても、口調固いわねー。もうちょっと砕けた感じで話してくれたらいいのに」

「人見知りする方なので、あまり面識ない人とはこうなります」

そして、クラヴィスに対しては警戒心を解くことがちょっとできない。

彼女、纏がきちんとできてる。
全身を覆う綺麗なオーラで、下手すると私よりも綺麗にできてるんじゃないだろうか。

つまり、念能力者の可能性がとても高い。

でも、敵意みたいな嫌な感じはしないので、ほんとに珍しいから声かけてくれたのかもしれないけど。

「そう……残念だわ。
そういえば、スミキさんは四季大会申し込んだの？」

「申込みました」

「じゃあ、あたしと対戦があるかもしれないわね」

あれ？

女性は私だけしか希望出してないって聞いてたけど？

「え？　女性は私しか申し込みしてないって……」

「ん。申し込んだのは、ついさっきだもの」

タイミングがずれたのかな？

一瞬、「ニューハーフ」とか「女装」とか「男の娘」とかいう言葉が頭に浮かんだけど、すぐにそれを打ち消した。

だって、どう見ても女の人だし。

「……悪いけど、優勝はいただくわよ？

貴女は、すでに《知っている人》みたいだから、手加減はしないわ」

スッ…と笑みを消して真顔になると、クラヴィスはそう言った。
それと同時に彼女のオーラが変わった。
暖かな優しい日差しのような気配から、鋭く冷たい氷のような気配に。
背筋に冷や汗が浮かぶ。
この人は、間違いなく強い……。
「私も、負けられない理由がありますから」
弟子卒業試験がかかっているのだ。
なんとか、あの宝石は手にしなければ。
「うん。良い返事ね。
それじゃ、またね？　スミキさん」

いつの間にか食べ終えていた彼女はそのままトレイを持って立ち上がり、返却口の方へと歩いていった。

私は、その姿をそのまま見送ることしか出来なかった。

今のままの私では彼女に勝てるかあやしい。

だからと言って、大会に出ないという選択はできない。

念能力を使うにしても、私の能力は闘うことには向かない。

闘いに役に立つ念能力を考えるべきなんだろうか。

すっかり冷め切ってしまった食事を前にしながら、私はため息をついた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1426w/

世界の片隅で生きよう

2011年10月9日10時15分発行